

会員の皆様へ

2003年から始まった、ふらんす plus シリーズは今回で5回めでしたが、このシリーズで初めてベートーヴェンが登場しました。

今回弾いてみて、音楽のすばらしさもさることながら、ベートーヴェンは、ピアノという楽器での色彩表現の可能性をとことんまで追求していったということ、あらためて実感しました。

例えば、「テンペスト」や「エロイカ変奏曲」の他にも、「ワルトシュタイン」のロンド主題に、まるで、ハーモニーの変化を無視(?)したような長いペダルを使うところがあります。これを、音楽学者などは、「当時の楽器は、ペダルを踏んでも響きが長く残りにくいので、ベートーヴェンは大ざっぱに長いペダルを書いた。現代のピアノで弾く場合には、ハーモニーの変化に合わせて、踏みかえるべきだ。」と、ばかげたことをおっしゃっていますが、そうではありません。長いペダルを使うことによって起こる、まるで絵の具の色が混ざりあったような、いろいろな微妙な、そして不思議な響き—ドビュッシーを先取りしたような—が、ベートーヴェンの頭の中にはあったのだと思われま。

もちろん、ただ、そのとおり普通に弾けば、汚い響きになってしまいます。ハーフ・ペダルを使う人もいますが、私がいろいろ試してみたところによると、ペダルはしっかりと深く、長く踏んで、手のタッチを工夫する—ハンマーが弦をやさしく打つようにすると、うまい具合に、余計な響きが自然に消えて必要なものが残って、効果がいいようです。

秋の公演は、いずれも満員の盛況でした。遠く、盛岡や大阪から東京へいらしたり、名古屋、富山へも会員の方々が“追っかけ”て下さり、大変嬉しく思いました。皆様へは心より感謝しております。

次回のふらんす plus は、日本では比較的なじみが薄いかもしれませんが、フランスでは大家のひとりに数えられる、フロラン・シュミットを紹介したいと考えています。楽しみにお待ち下さい。

さて、J.S.バッハの「ゴルトベルク変奏曲」は、いつ弾こうかと以前から考えていましたが、ちょうどコンサートの日が2月29日という閏年の1日であることから、何か特別なものを、と思い、弾くことにしました。

ゴルトベルクの、いつ果てるとも知れない永遠に続くような、大きな音楽、それと対照的に、極限まで音を切りつめて最大の表現を追求したウェーベルンの音楽—ウェーベルンが初演に際して細かい注意書きを書き込んだ楽譜を見ると、少ない音にうんと表情を込めて弾いてほしいことがよくわかります—、その両極をぜひ味わっていただければと思います。

本年もどうぞよろしく願いいたします。

2007年12月

岡田 博美